

養豚における一貫経営の営農確立に関する調査研究

谷口昭二・折田安行・石神信男・湯ノ口幸一(鹿児島県畜産試験場)

Shoji TANIGUCHI, Yasuyuki ORITA, Nobuo ISIGAMI and Koichi YUNOKUCHI : Establishment of Consistent Management in Swine Farming

養豚の飼養規模が年々拡大する中で、養豚経営の安定と技術向上を求めて、子豚生産から肥育まで行う一貫経営が進展しつつあるが、農家によって技術的、経営的にかなりの格差がみられる。そこで、その格差要因と一貫経営にみられる共通の問題点を明らかにし、養豚による営農確立の指針を得るために個別事例調査を実施したので、その概要を報告する。

1. 調査の方法

本県の主要養豚地帯(曾於, 肝付地区)における養豚一貫経営農家4戸を選定し、年間(1983年度)を通して、所定の記録を依頼するとともに、月1回の面接により調査を実施した。

1) 調査農家の選定条件 ①家族労力を中心とした養豚一貫経営農家で、母豚の常時飼養規模が30~50頭程度
②畜産基地農家2戸, 一般農家2戸 ③記帳能力があり、十分な調査協力が得られること ④豚等が悪性な病気に汚染されていないこと

2) 調査項目 ①経営概況 ②飼養技術(繁殖, 肥育)成績 ③収益性

2. 調査結果と考察

1) 繁殖成績 第1表に示すとおり年間分娩回転, 生産頭数(哺乳開始頭数), 離乳頭数において農家間でかなりの格差がみられた。この格差要因としては、①交配成績 ②母豚の飼養管理 ③母豚の能力があげられる。交配成績では、受胎率や長期空胎豚の数に直接的な格差がみられるが、交配担当者の専任化, 畜舎様式, 記帳能力, 交配方法が格差縮小の要点になっている。飼養管理では、母豚への栄養状態に応じた適切で、きめ細かな飼料給与体系(栄養管理)と畜舎環境(暑熱, 換気, 風通し, 飼育密度等)が重要な注意点となっている。

なお、第1図に示すように繁殖成績の悪い農家ほど、飼養管理の不当に起因する繁殖障害等による母豚の廃用やへい死の割合が高くなっている。母豚の能力については、母豚の品種や産歴構成との関係で調査したが、繁殖成績のよい農家では、品種の統一化が進んでおり、産次別腹数では、1,2産の割合が低く、高産次によるものが比較的多く、ここに安定した成績を生み出す要因がある。

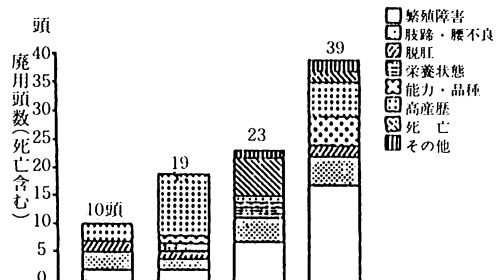
2) 肥育成績 年間一母豚当たりの肉豚販売頭数は、農家により14.4~20.0頭と幅があるが、この幅は、もっぱら繁殖成績によるもので、繁殖成績の差が即売頭数差につながっている。枝肉重量は平均で66~68kgでほぼ理想的であるが、季節的要因や市況の対応により、変動がみられた。この変動は、特にケージ肥育のC, E農家で

枝肉格付を低下させる要因として作用した。また、薄脂による格落ちが65~77%もみられ、ケージでの肥育ならびに適正体重の出荷技術の改善が必要である。

3) 収益性 枝肉1kg当たりの総原価で479~606円, 所得率で14.0~36.2%と顕著な格差がみられたが、これには、技術成績が大きく関与しており、一母豚当たりの年間生産・仕上げ頭数をいかに増やすかが大きな課題である。また経営の特徴として、衛生費と水道光熱費には農家による差異がみられ、コスト低減を図る余地が残されている。

第1表 主要技術成績ならびに収益性

項目/農家		A	B	C	E
飼養規模	常時				
	種 雌 豚	37.9頭	45.3	53.6	58.8
	種 雄 豚	4.7頭	3.8	4.0	5.2
繁殖成績	分娩回転	2.24回	2.29	1.98	2.11
	生産頭数/腹	11.3頭	11.4	9.1	9.8
	離乳頭数/腹	10.2頭	10.2	8.3	8.9
	受胎率	94.3%	91.7	88.0	85.3
	長期空胎豚				
	30日以上	9頭	12	23	20
肥育成績	4ヵ月以上	2	3	6	4
	肉豚出荷				
	頭数/年間母豚	20.2頭	19.5	14.4	19.6
	枝肉重量/頭	66.0kg	66.5	68.0	67.1
	(標準偏差)	(5.6)	(4.8)	(5.5)	(5.9)
	枝肉 上物	69.7%	58.2	43.5	39.9
収益性	格付 並物以下	4.5%	6.1	17.1	17.6
	(うち薄脂)			(77.3)	(65.2)
	総原価/枝肉1kg	516円	479	606	601
所得/母豚	285,226円	310,034	104,735	119,453	
所得率	31.5%	36.2	16.4	14.0	



第1図 母豚の廃用理由